

(報告書)

嗜好品カートの流通 —サナアと地方都市の比較—

助成研究者 大坪玲子 ((東京大学) 文化人類学)

1. 研究目的

カートは紅海を挟んだ東アフリカとアラビア半島で主に栽培され、その新鮮な若葉を噛むと軽い覚醒作用を感じる嗜好品である。宗教上の理由でアルコール飲料がほとんど手に入らず、また娯楽施設が極端に少ないイエメン共和国では、気の合った友人とカートを噛みながら過ごす午後の数時間は、老若男女の楽しみとなっている。

イエメンでは原則としてカートの輸出入が禁止されているが、エチオピアやケニアではカートは外貨を稼ぐ貴重な輸出品となっている。カートは国によっては違法薬物と認定されているが、イエメン、エチオピア、ケニア、イギリスでは嗜好品として扱われている。

カートは、イエメン経済を考える上で無視することのできない重要な商品作物である。世界銀行によればカートは GDP の 6% を占め、イエメン人の労働者の 7 人に 1 人はカートに関係する仕事(生産や流通)に就いている。カートはイエメンの農地の 10% を占めるにすぎないが、農業 GDP の 3 分の 1 を占める。農業労働力の 3 分の 1 がカート生産に携わっている(2005 年) [World Bank 2007]。

筆者はこれまでイエメンの首都サナアで消費されるカートについて調査を行ってきた。雑穀やコーヒーを凌駕して生産量が増加しているカートは、食料自給率を下げ、外貨獲得につながらないことをしばしば非難されてきた[大坪 2013-b]。しかしカートは生産者にとって貴重な現金収入源であり、頼りになる地縁血縁関係のない人にとっては小額の資金で始められる手軽な商売であり、消費者にとっては社交の場の潤滑油となっている[大坪 2012]。

サナアのカートの流通は、非常に効率的に行われている。早朝サナア近郊で収穫されたカートは、その日の昼前にサナア市内の市場に並び、その日の午後には消費される。介在する商人は 1-2 人であり、生産者は家族経営であり、商人はほとんどの場合個人事業である。サナア近郊の野菜・果物は政府が設置した卸売市場を經由し、豆類・香辛料は少数の民間会社が集荷から輸出まで手掛けていることと比較すると、カートの流通は官民どちらからも規制がなく、近代化も進んでいない。しかしこの方法が、新鮮で多種類あるカートを流通するのに効率的なのである[大坪 2010]。さらに付け加えると、カートの流通は反社会的な組織が関与していない“健全”なものでもある。

本研究はこれまで行ったサナアでの調査をふまえて、地方都市ホデイダとタイズにおけるカートの流通経路を明らかにし、サナアの流通方法と比較することを目的とする。ホデイダとタイズを選んだ理由は以下のとおりである。ホデイダは高温多湿ゆえにカートも傷みやすく、カート生産地から遠く離れているため、迅速な流通が必要とされる。タイズは歴史的にサナアよりもずっと古いカートの生産地、消費地である。また女性が小売りに参入している¹。

2. 研究方法

イエメンのサナア、ホデイダ、タイズで、カート商人を中心に聞き取り調査を行った。サナアではこれまでの調査との変化、“アラブの春”による影響、昔のカート産業の状況に関してサナア市内でカート商人や消費者から、サナア近郊の生産地（ハムダーン、バニー・マタル）を訪問して生産者から、聞き取り調査を行った。ホデイダ、タイズのカート商人に対する聞き取り調査で明らかにしたことは以下の項目である。

- カートの種類と生産地の分布
- カートを販売する場所
- 流通経路
- カートの仕入れ方
- 取引相手との信頼関係
- カート商人になったきっかけ
- カート販売に対する価値観

3. 研究計画と実施状況

現地調査は以下の日程で実施した。

2013年8月 15～17日：サナア
18～23日：ホデイダ
24～30日：タイズ
31～9月4日：サナア

イエメンの政情が不安定だったので出発を遅らせたため、当初の予定よりも1週間少ない滞在となった。聞き取り調査をした人数はサナアで11人²、ホデイダで14人、タイズで17人である。

¹ 商品を見ず、女性が小売りをすることはイエメンのほとんどの地域で“はしたない”ことと考えられている。タイズのサブル山出身の女性は市場で小売りに参入している“進んだ”女性として知られている。

² 紙幅の都合で、サナアのインフォーマントは省略する。

【ホデイダのインフォーマント】

	年齢（才）	出身地	職業
①	26	サナア州マナーハ郡	カート商人
②	45	ベイダ州アルシュ郡	ワキール ³
③	38	ホデイダ市	カート商人
④	30	ホデイダ州ムラーワ	ウンマール ³
⑤	30	サナア州マナーハ郡	カート商人／ウンマール
⑥	50	ホデイダ市	カート商人
⑦	35	ホデイダ市	カート商人
⑧	37	ホデイダ市	カート商人
⑨	65	タイズ州ホジャリヤ	カート商人
⑩	60	ホデイダ市	カート商人
⑪	70	タイズ州ムカーティラ	カート商人
⑫	65	タイズ州ムカーティラ	カート商人
⑬	40	マフウィート州	カート商人
⑭	27	ライマ州	カート商人／アーキル ³

【タイズのインフォーマント】

	年齢（才）	出身地	職業
①	27	タイズ市	ホテル従業員
②	38	サナア州ハウラー郡	カート商人／ディレクター
③	30	イップ州ホベイシュ郡	カート商人
④	14	ライマ州	カート商人
⑤	32	イップ州	カート商人
⑥	22	ライマ州	カート商人
⑦	65	タイズ州サブル山	カート商人
⑧	58	タイズ州サブル山	カート商人
⑨	38	タイズ州サブル山	カート商人
⑩	35	タイズ州サブル山	生産者・カート商人
⑪	28	タイズ州シャルアブ・ラウナ郡	カート商人
⑫	34	タイズ州シャルアブ・サラーム郡	カート商人
⑬	25	ダーリウ州ホシャー郡	カート商人
⑭	35	タイズ州サブル山	カート農民
⑮	47	イップ州ウデイン郡	ワキール
⑯	45	タイズ州サブル山	カート商人（女性）
⑰	50	タイズ州サブル山	カート商人（女性）

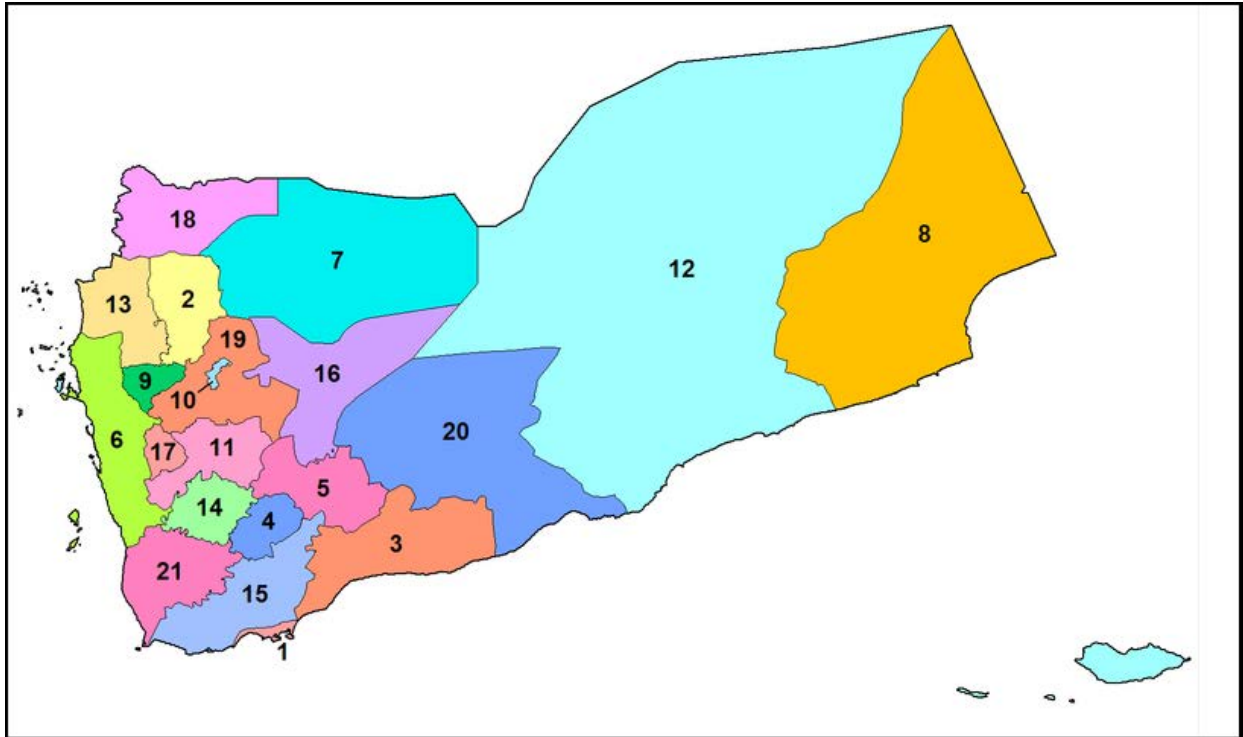
³ ワキール、ウンマールは後で説明する。アーキルは市場の場所代の徴収、喧嘩の仲裁などを行っている。

4. 研究成果

4-1. 調査の前提

4-1-1. 各州の特徴

【イエメン州別地図】



1 アデン 2 アムラーン 3 アブヤン 4 ダーリウ 5 ベイダ 6 ホデイダ 7 ジョウフ 8 マハラ 9 マフウィート 10 サナア市 11 ダマール 12 ハド라마ウト 13 ハッジヤ 14 イップ 15 ラヘジ 16 マーリブ 17 ライマ 18 サァダ 19 サナア 20 シャブワ 21 タイズ

サナア州（19）はイエメン共和国の内陸西部に位置する。首都のサナア市（10）に人口が集中しているため(1,747,834人)、サナア州の人口は多くはない。タイズ州(21)はサナア州の南に位置する。州別人口ではイエメン最大である（全人口の12.16%）。降水量も多く、タイズ州の北にあるイップ州（14）とともに雨期にあたる夏季には、山頂から麓まで緑色の階段耕地が広がる。ホデイダ州（6）はタイズ州に次いで2番目に人口が多い（全人口の11%）。紅海沿岸に位置するために高温多湿であるが、降水量は多くない。

【ホデイダ、タイズ、サナア各州の人口・面積・平均気温・降水量】

	ホデイダ州	タイズ州	サナア州
人口（人）	2,157,552	2,393,425	918,727
面積（km ² ）	117,145	10,008	11,877
平均気温（℃）	29	21	8-12
降水量（mm）	128.8	737.1	170.0

<http://www.yemen-nic.net/index.php> より筆者作成

4-1-2. ホデイダ市、タイズ市、サナア市の特徴

主な調査地はサナア市及びそれぞれの州の州都（ホデイダ市、タイズ市）になるの
で、それらに関する説明を補足しておく。

サナア市は周囲を山に囲まれた盆地にある。標高 2300m で、年間を通して湿度が低
く、3 都市の中では最も寒い⁴。カート市場が 20 か所以上ある。

ホデイダ市は年間を通して非常に暑く、調査を行った 8 月には日中 40 度近くまで気
温が上がり、夜間でも 30 度を下らなかつた（手持ちの温度計による）。現在イエメン
第 2 の港湾都市である。歴史的にはモカ、アデンが港として有名であり、ホデイダの
港湾整備が進んだのは 20 世紀に入ってからである。カート市場は 6 か所確認した。

【ホデイダ市にあるカート市場】

通称	備考	アラビア語表記
オスマーン	一部に屋根あり。	سوق عثمان
カラア	小さな市場。	سوق القلعة
ジャディード	場内は屋根あり、場外は屋根なし。	سوق القات الجديد
サッターム／シュハダー	通りに面したところでカート、 奥で野菜、魚を販売。	سوق صدّام / سوق الشهداء
マトラク	古い区画にある小さな市場。	سوق المطراق
カディーム／ジュムラ	朝だけ卸売（ジュムラ）をやっ ている。	السوق القديم / سوق القات بالجملة

タイズ市は標高 1500 メートルで、サナアよりも夏は暑く、冬はあたたかく、湿度も
やや高い。ドイツ人の探検家ニーブール[1733-1815]⁵が、1763 年にタイズでカート

⁴ サナアは夏季で最低気温 17 度、最高気温 32 度、冬季で最低気温 5 度、最高気温 17 度
程度である（筆者の体験による）。

⁵ デンマーク王フレデリク 5 世[在位 1746-1766]が 1761 年に派遣したエジプトやアラビ
ア半島の探索隊に参加した。

嚙んだ記録[Niebuhr 1994]が、外国人がイエメンでカートを嚙んだ記録の嚙矢となる。カート市場 6 か所確認した。他に 2 か所あるが、訪問できなかった。

【タイズ市にあるカート市場】

通称	備考	アラビア語表記
アシュバト	現在は閉鎖中。	سوق الأشبط
ビール・バーシャー	屋根あり。	سوق بير باشا / سوق البير
バーブ・ムーサー	屋根なし。	سوق باب موسى
ウセイフィラ	屋根なし。卸売、セリも行う。	السوق المركزي عصيفرة
ザグルーリー	屋根あり。	سوق الزغلولي
シーナ	歩道上。	سوق صينة

4-1-3. 部族

イエメンは部族社会であるといわれるが、非常に大雑把な、誤解を生む表現である。確かに数百年前から部族という社会組織が存在している。しかし現在イエメン人皆がある部族に所属意識を持っているわけではなく、イエメンの国土がもれなく部族領土に分割されるというわけでもなく、有力部族がイエメンの政治経済を握っているわけでもなく、政治家が特定の部族出身というわけでもない。現在では一部の地域が部族、一部の人々が部族民と自称・他称されるにすぎない。

現在のイエメン共和国は 1990 年に南北イエメンが統合して成立した。特に部族的な紐帯が強いといわれているのは、旧北イエメン（118 ページの地図の 2,4,5,6,7,9,10,11,13,14,16,17,18,19,21）のダマール州（11）以北（上イエメン）であり [Dresch 1989]、それ以外の地域では部族組織が崩壊したといわれている。下イエメン（ダマール以南）はアイユーブ朝[1173-1229]、ラスール朝[1229-1454]支配下で部族組織が破壊され、1962 年の共和政革命に続く内戦[1962-1970]においてさらに破壊が進んだ [Stokey 1978; Swagman 1988]。ホデイダを含む紅海沿岸地方にも部族は存在していたが、20 世紀前半に上イエメンの部族を率いるザイド派イマーム⁶によって破壊された [Wenner 1967; Peterson 1982]。旧南イエメンは社会主義政権下[1967-1990]で部族的な組織は崩壊した [Serjeant 1977; Lackner 1985]⁷。

⁶ ザイド派はイスラームのシーア派の一派。イマームには多くの意味があるが、本稿ではザイド派の最高宗教指導者を意味する。ザイド派イマームは、1962 年の革命まで 1000 年以上の間、主に上イエメンでその勢力範囲を大きく変化させながら存在していた。現在のイエメンでは上イエメンはザイド派、それ以外の地域はスンナ派であるが、イスラーム世界で想定されるスンナ派とシーア派の対立は歴史上ほとんど見られなかったし、現在もそのような対立構造が指摘されることはほとんどない。

⁷ ただしここ数年、旧南イエメンは分離独立を画策しており、その中でハドラマウト部族連合が“復活”している。

中東の部族民といえば遊牧民（ベドウィン）が有名であり、遊動生活をする彼らは定住農耕民を蔑視する傾向にある[例えば片倉 2002]が、上イエメンの部族民の生業は農業であり、農業は誇るべき生業である。彼らは自分の属する部族の領土の平和は自分たちで守るべきで、もし平和が脅かされたら武力を使ってでもそれを阻止するべきであると考え（実際にかかなりの軍事力を保有していることが多い）[Dresch 1989]。部族民はその自立を誇りにしているが、保守的で攻撃的であることを非難されてきた。

調査地の中ではサナアが最も部族的な紐帯が強い地域にあり、ホデイダ、タイズは部族な組織は崩壊し、人々は「自分たちが部族民だなんてとんでもない。部族ではなく家族だ」と、部族や部族民を否定的に捉える傾向にある。

4-1-4. カートと“浮気性”

カートは鮮度が重要なので、買いだめはしないで、毎日噛みたい人は毎日購入する。カートの味は、一言でいえば苦い⁸。農薬や化学肥料を使っていないと、良い匂いがするそうであるが、あまり強い匂いではなく、筆者はよくわからない。1回分のカートの値段は日本円で100円～1万円近くまであるが、高額なカートはそれなりにうまいと思う。

カートとイエメン人の関係は酒と日本人の関係に似ている。つまり酩酊だけを求めて酒を飲む人もいるが、皆で集まって歓談しながら飲むのが楽しいという点であり、カートも覚醒作用を求めて噛むよりも、友人と集まって歓談しながら噛むのが楽しいのである[大坪 2005]。

カートを違法薬物とし、規制対象としている国も多い⁹。ただし現在のところ、国際機関では特にカートを危険視していないようである。WHOはカートを「深刻な中毒性薬物（a seriously addictive drug）」と分類していない[Al-Mugahed 2008]。雑誌 *WHO Drug Information*でもカートを分析した記事はない。また国連薬物犯罪事務所の2009年の報告書においても、カートはエチオピアとケニアでの乱用が、表で示されているにすぎない¹⁰。

カートが薬物として注目されていない理由は、他の薬物に比べればその心身への効果は小さくなく、1990年代以降世界的にカートの消費地域は拡大しているものの（その大きな原因はソマリア内戦の激化で同移民・難民が世界中に拡散したことである）、使用する人口が限定されていることが指摘できる。

イエメンに話を戻すと、サナアで出回っているカートの名称は生産地の郡名にちなむことが多いが、郡名は部族名であることが多い。このことから、カートは部族的な

⁸ ある日本人は雑草の苦さに似ていると表現した。日本に留学したイエメン人はカートが恋しくなり、いろいろ試した結果、煎茶の葉をかじる方法にたどり着いたそうである。

⁹ 違法薬物としてのカートの位置づけに関しては[大坪 2013-b]参照。

¹⁰ http://www.unodc.org/documents/wdr/WDR_2009/WDR2009_eng_web.pdf

紐帯を利用して流通していることが想定されるが、そうではなく、カート商人は部族的な紐帯がなくてもカートを生入れられる。またカートに定価はなく、購入するには値段交渉が必要になるが、バザール経済で情報の非対称性を補完する方法として利用される売り手と買い手との間の顧客関係もまたカート売買に万能ではない。というのも、カートは同じ畑であっても、季節、降水量、灌水、施肥などによって品質が変わりやすいため、買い手（購入者、カート商人）は売り手（カート商人、生産者）に対して“浮気性”であり、それを知っている売り手も買い手に対して“浮気性”である。つまり顧客関係によって得られるメリット（値段交渉の時間がかからなくなり、粗悪な商品を生りつけられる心配もなく、つけ払いも行える）は、カート売買ではメリットにならないのである[大坪 2013-a]。

【サナアに出回っている主なカート】

名称	生産地
ハムダーニー	サナア州ハムダーン郡
アル＝ガルヤ	サナア州ハムダーン郡
アルハビー	サナア州アルハブ郡
ハウラーニー	サナア州ハウラーン郡
ハイミー	サナア州外ハイマ郡、内ハイマ郡
マタリー	サナア州バニー・マタル郡
ホシェイシー	サナア郡バニー・ホシェイシュ
ニフミー	サナア州ニフム郡
ホーシー	アムラーン州ホース郡
サウティー	アムラーン州シャハーラ郡
アンシー	ダマール州
アハジュリー	マフウィート州シバーム・コーカバーン郡
サァディー	サァダ州

[大坪 2005]を一部訂正

4-2. 主なカートの種類

ホデイダ、タイズで出回っている主なカートは表のとおりである。カートの名称はシステムチックではなく、例えばサァダ州産のカートはすべてサァディーと呼ばれるが、その中のラージフ郡産であればラージヒーとも呼ばれる。ラージフ郡産のカートをどう呼ぶかはその商人次第である。煩雑になるため、本稿では下線を引いたものを総称として使う。

サナア、ホデイダ、タイズで流通しているカートの種類は大きく異なっている。3都市で共通して販売されているのはアムラーニー(アムラーン州産)、アンシー(ダマール州産)、サァディー(サァダ州産)だけである。これらのカートは安価であるため、一定の需要があるものの、うまいカートである評価はあまり聞かれない。サナアの場合はほとんどの生産地が市内から車で片道 2 時間程度の距離にあるが、ホデイダの場合はそれ以上であることが多く(近い産地市場まで 2-3 時間、遠い産地市場では 5 時間以上)、タイズの場合は 1 時間以内の生産地から仕入れることが多い。

【ホデイダに出回っている主なカート】

名称	生産地
シャミー、マハービシャ、ジェイヤーハ、ガフル・シャムル	ハッジヤ州
ラダーイー、ウマリー、ゲイフィー、ファラーザ、マラーハ、アッバーン	ベイダ州ラダーア郡
アンシー、スレイマーニー・アーディ、スレイマーニー・アサーキル	ダマール州
サァディー、ラージヒー、ハウラーニー、シャアーラ、ハフジー	サァダ州
アムラーニー、サウティー	アムラーン州
マタリー	サナア州バニー・マタル郡
ハイミー	サナア州外ハイマ郡、内ハイマ郡
ハラージー	サナア州マナーハ郡
ウデイニー	イップ州ウデイン郡
ライミー	ライマ州
マーウィヤ	タイズ州マーウィヤ郡

ホデイダで夏季に流通量が多いのはシャミー、ラダーイー、アンシー、サァディー、アムラーニーである(市場での聞き取り調査による¹¹⁾。シャミー(ハッジヤ州)はサナア、タイズではほとんど流通していない。シャミーは良質なカートであるとサナアでも評判が高いが、サナアまで運搬すると 6 時間かかる。ホデイダでシャミーを仕入れるのなら片道 3 時間で済む。サナア州のカートも 3 時間程度でホデイダに流

¹¹ 1970 年代から 20 年以上、イエメン政府が発行する統計年鑑にカートの項目は抹消された。これはカートが薬物に類する農作物であるからという理由であろう[大坪 2014]。1997 年の統計年鑑からカートの総生産量、総作付面積は公開されるようになったが、生産地別のデータ、カート商人の総数、カート市場の数は公表されていない。

通しているが、流通量は多くない。ハッジヤ州やサナア州以外から運搬されるカートはホデイダ市まで 5 時間以上かかる。サナアーホデイダは急峻な山道が続くが、この山道を使わずにシャーミー、アムラーニー、サァディー、ラダーイー、アンシーはホデイダに運搬できる。

【タイズに出回っている主なカート】

名称	生産地
マーウィヤ	タイズ州マーウィヤ郡
ムレイシー	ダーリウ郡ムレイス山
サブリー	タイズ州サブル山
シャルアビー、アウニー	タイズ州シャルアブ・サラーム郡、シャルアブ・ラウナ郡
メイタミー	イップ州
ジャアシャニー	
ウデイニー	
スフーリー	
ワカシー	
ラダーイー	ベイダ州ラダーア郡
アンシー	ダマール州
アムラーニー	アムラーン州
サァディー	サァダ州

タイズで夏季に流通量が多いのはマーウィヤ、ムレイシー、サブリー、シャルアビーである¹²。これらのカートはアデンにも出荷されている。タイズのカートは少量ホデイダにも流通しているが、サナアでは流通していない。サナアータイズは急峻な山道があり、またタイズのカートは遠方から運ぶほど特徴的な性質を持っていないことがその理由だと考えられる¹³。

ホデイダに運搬されるカートは、長距離移動と高温多湿の不利を補うために、カートを飼料などで覆ったり（アンシー、ラダーイー）、カートに濡れたティッシュを巻きつけたり（ハイミー）、氷を挟んだり（アムラーニー）、バナナの葉でくるみ、丁寧に

¹² ホデイダで人気のあるカートはアンシー、ラダーイーで、タイズで人気のあるカートはマーウィヤであるが、いずれも化学肥料や農薬を使っていることでも有名である。サナアでは“有機栽培”のものが人気があり、化学肥料や農薬の利用は隠されることも多い。

¹³ サナアの人は、タイズ州やイップ州のカートをあまり高く評価しない。サナアよりも降水量も多いため、カートの品質が良くないというのである。

形作ってあったり（シャーミーのマフサル【写真 1】など）といった工夫がなされている。布袋に俵状態で包まれて市場まで運ばれるものもある。

タイズもカートを手際よくくるんであることが多い。アウニーは 40 センチ四方の座布団状（トゥワーク）に包まれている（トゥワーク 1 つで 4-5 人分になる）。サブリーも手際よく包まれ（マンディール）、生産者の名前やマークが入っている【写真 2】。マンディールの中にはカートの他に飼料が一束入っていて、保冷材の役割を果たす。ビニール袋の色によって主な生産地がわかるようになっている（アウニーは緑、マーウィヤは青、サブリーは半透明）。



【写真 1】円錐形にまとめられたマフサル。バナナの葉から出したところ。



【写真 2】生産者の名前が書いてあるサブリー。葉が同じ方向に並んで包まれている。

4-3. 仕入れるカート

サナアのカート商人が、自分や消費者の嗜好に基づいて仕入れるカートの種類を変更することは容易である。ホデイダ、タイズのカート商人も現在のカートは自分や消費者の嗜好に基づいて選んでいることが多いが、仕入れるカートを変更することはサナアほど容易ではない。カートの種類がサナアほど多くないというのが理由の 1 つである（取引相手との信頼関係については後述）。

またサナアでは、夏季と冬季で仕入れるカートをかえるカート商人は、ほとんどいない。カートは夏季に生産量が増え、冬季に減るが、畑の標高差や収穫時期を考慮すれば、年間を通して同じ生産地のカート仕入れることは難しいことではない。年間に 5-6 種類のカートを 1-2 か月ごとに扱うカート商人もいるが、彼らはその畑の“旬”のカートを追っているだけであり、季節に左右されているわけではない[大坪 2013-a]。

タイズも同様に夏季と冬季でカートをかえる商人は少ない。夏季と冬季でカートをかえる商人は 2 人いるが、どちらも夏季にマーウィヤ、冬季にムレイシーを扱ってい

る。冬季にマーウィヤの生産量が減るからという理由である（年間を通してマーウィヤを扱う商人もいる）。サブリーは冬季に生産量が激減するが、⑨⑩は別のカートにかえず、カート販売以外の仕事をする。

【タイズのカート商人が扱うカート】

年間同じカート扱う	③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑭⑮⑯⑰
夏季と冬季で異なるカート扱う	②⑤
その他	⑫（年間を通して複数のカート扱う）

ホデイダでは冬季と夏季で仕入れるカートをかえる商人が多い。ホデイダは年間同じカート扱う商人が6人、夏季と冬季で扱うカートをかえる商人が8人いる。この8人を見ると、①⑤⑥が冬季に仕入れるハウラーニー、ラージヒー、ハフジー、シャアーラはサアダ州のカートである。サアダ州はイエメン最北端に位置するが、場所によっては温暖である。夏季に多く出回るアンシーやラダーイーが冬季に減るため、サアダ産カートにかえる。

【ホデイダのカート商人が扱うカート】

年間同じカート扱う	②③④⑨⑩⑬
夏季と冬季で異なるカート扱う	①⑤⑥⑦⑧⑪⑫⑭

【ホデイダの商人で夏季と冬季で異なるカートの種類】

商人	夏季のカート	冬季のカート
①	マタリー、ハラージ、ウマリー	ハウラーニー、ラージヒー
⑤	アンシー	ラージヒー
⑥	ウマリー、アンシー	ハフジー、シャアーラ、ラージヒー、アムラーニー
⑦	ハイミー、マタリー	アンシー
⑧	ラダーイー	ウデイニー、ラージヒー、サアディー+イッビー
⑪	シャーマー	サウティー
⑫	ラダーイー	シャーマー、サウティー
⑭	ライミー	ブルイー

4-4. 販売する場所と時間

カートは通常カート市場と呼ばれる場所で、他の商品とは明確に区別されて販売される。カート市場には店舗や露天のように数種類の売り場がある。サナアにはダッカ（70センチ程度の高さのコンクリート製の台を半畳程度に区切った場所）と呼ばれる

売り場があるが、ホデイダ、タイズでは見られなかった。またサナアでは地面に腰を下ろして販売する商人（ムファッラシュ、あるいはバッサータ¹⁴）が多く、市場によっては多くの面積を占めるが、ホデイダではほとんどなく、タイズでも多くなかった。ホデイダは高温であるために地面に直接腰を下ろすのは売る側も暑く、カートも傷みやすいからである。

【ホデイダのカート商人が売る場所】

場所	カート商人
バスタ	⑥⑦⑪⑬
ムラッバア	②③④⑤⑧⑨⑩⑫
その他	①（車の中）
不明	⑭

【タイズのカート商人が売る場所】

場所	カート商人
バスタ	③⑦⑧⑨⑪⑫ ⑬⑯
サリール・マーサ	②③⑤
店舗	④⑥⑩⑮
市場のすぐ外	③
路上	⑰

③は市場の込み具合を見て場外で売る。

サナアのダッカに相当する売り場として、タイズ、ホデイダも台状の売り場を設置している。ホデイダでは木製の台（ムラッバア）の上で売る【写真 3】。夏は日中 40 度近くなるが、屋根がついているところはあるけれども冷房施設のある市場はない。場所によっては屋根もなく、日差しを遮るのは日除けだけである。タイズでは金網で仕切られたマーサあるいはサリールと呼ばれる売り場がある【写真 4】。誰でもどこでも使用でき、場所代も一律で、1日に数人が利用することも可能である。



【写真 3】オスマーン市場で布に覆われたムラッバアに座る少年。手にしているカートはアンシー。日除けで日差しを遮っている。



【写真 4】マーサが並んでいるザグルーリー市場。

¹⁴ 地面で売る人をバッサータ、売る場所をバスタという。

ホデイダのムラッバアは 1 日 1000-1500 リヤル¹⁵、バスタは 1 日 50-500 リヤルである。タイズでは店舗は 1 日 1000-4000 リヤル、マーサは 2000-4000 リヤル、バスタは 500 リヤルである。

サナアのカート市場は午後 3 時をすぎると客は減り、商人は安売りを始める。日が落ちてから販売を続ける商人は非常に少ない。カートはほとんどの人が午後から夕方にかけて嘯むからである。一方ホデイダやタイズでは夜間にカートを嘯む人が多いため、カート市場も遅くまで賑わっている。カート商人がカートを販売する時間も、サナアに比べてホデイダ、タイズでは長くなり、時には明け方までカートを売ることもある¹⁶。ホデイダでは電気ランプ、ホデイダではガスランプが夜間のカート市場では使われる。

4-5. 流通経路

サナア同様に、ホデイダ、タイズにおいても流通に介在する商人は 1-2 人であり、「細くて短い」流通経路が形成されている。生産地で早朝に収穫されたカートは昼前にそれぞれのカート市場で販売が開始される。政府や民間企業による介入はなく、大規模化は進んでいない。

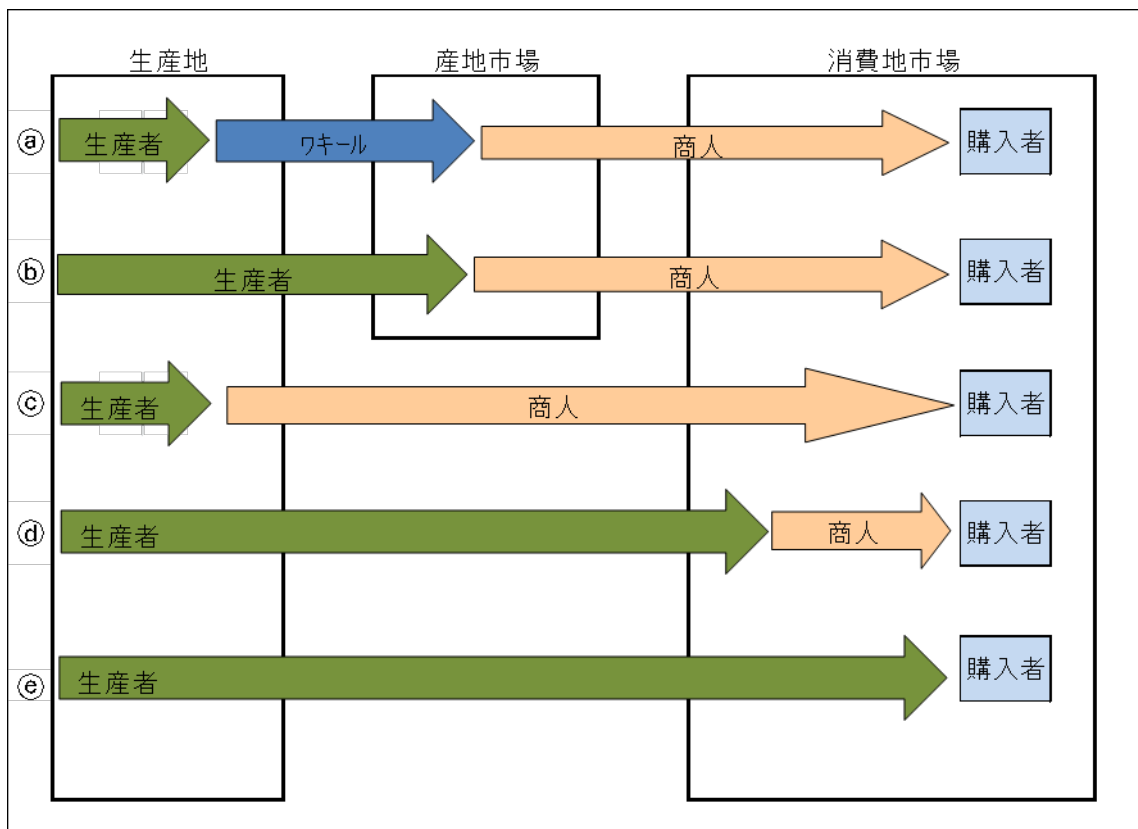
¹⁵ 2014 年 8 月のレートは 1 ドル ≒ 215 リヤル

¹⁶ ただしサブル山から下りてきてサブリーを売る商人は、暗くなる前に売り切り、山へ帰る。

4-5-1. サナアの特徴

サナアの流通経路は図のように5つの方法があるが、①~③がほとんどであり、④⑤は非常に少ない。商人は生産地や産地市場で、生産者やワキール¹⁷と相対取引してカートを仕入れることが多い[大坪 2010]。③は商人が生産者のカート畑を実際に見て、数日分の契約を口頭でする方法である。契約は数日分であっても、毎朝カートを収穫する。産地市場は舗装された幹線道路沿いにあることが多いので、産地市場までは乗合で行けるが、カート畑から仕入れる場合は、畑のあるところまで自ら行かねばならないので、自分の四輪駆動車を持つ必要がある。

【サナアの流通経路】



[大坪 2010]を一部訂正

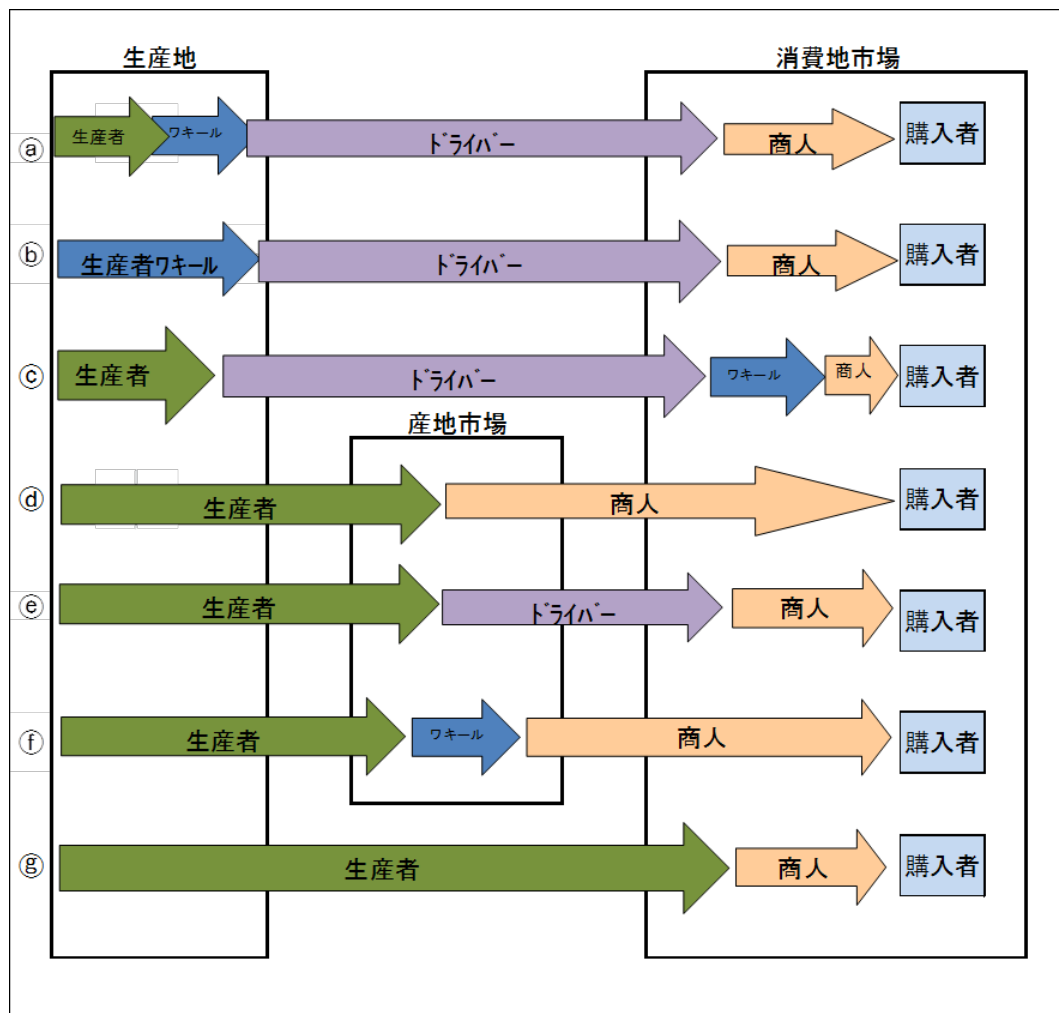
¹⁷ ワキールは生産者と商人の間にいるやや大規模にカートを取引する商人で、生産者からカートを仕入れて他の商人に売ったり、仕入れたカートを自分が雇っている労働者（ウンマール）に売らせたり、ドライバーを雇ったり、時には自ら小売りも行ったりする。

4-5-2. ホデイダの特徴

ホデイダの流通経路は 7 通りあるが、生産地と流通経路がかなり関係している。①～③はラダーイー（ベイダ州）、アンシー（ダマール州）、サアディー（サアダ州）など、生産地が遠いところのカートの流通経路である。運搬は運搬専門の人（本稿ではドライバーと呼ぶ）が行うことが多い。ドライバーはワキールに雇われている場合と、個人で営業している場合がある¹⁸。

④～⑧はシャーミー、④⑥⑧はマタリーやハラージを仕入れる方法である。いずれも生産地が比較的ホデイダに近い。生産地が比較的近いと、農民から仕入れることも可能であるが、畑を見て仕入れることはほとんどない。

【ホデイダの流通経路】



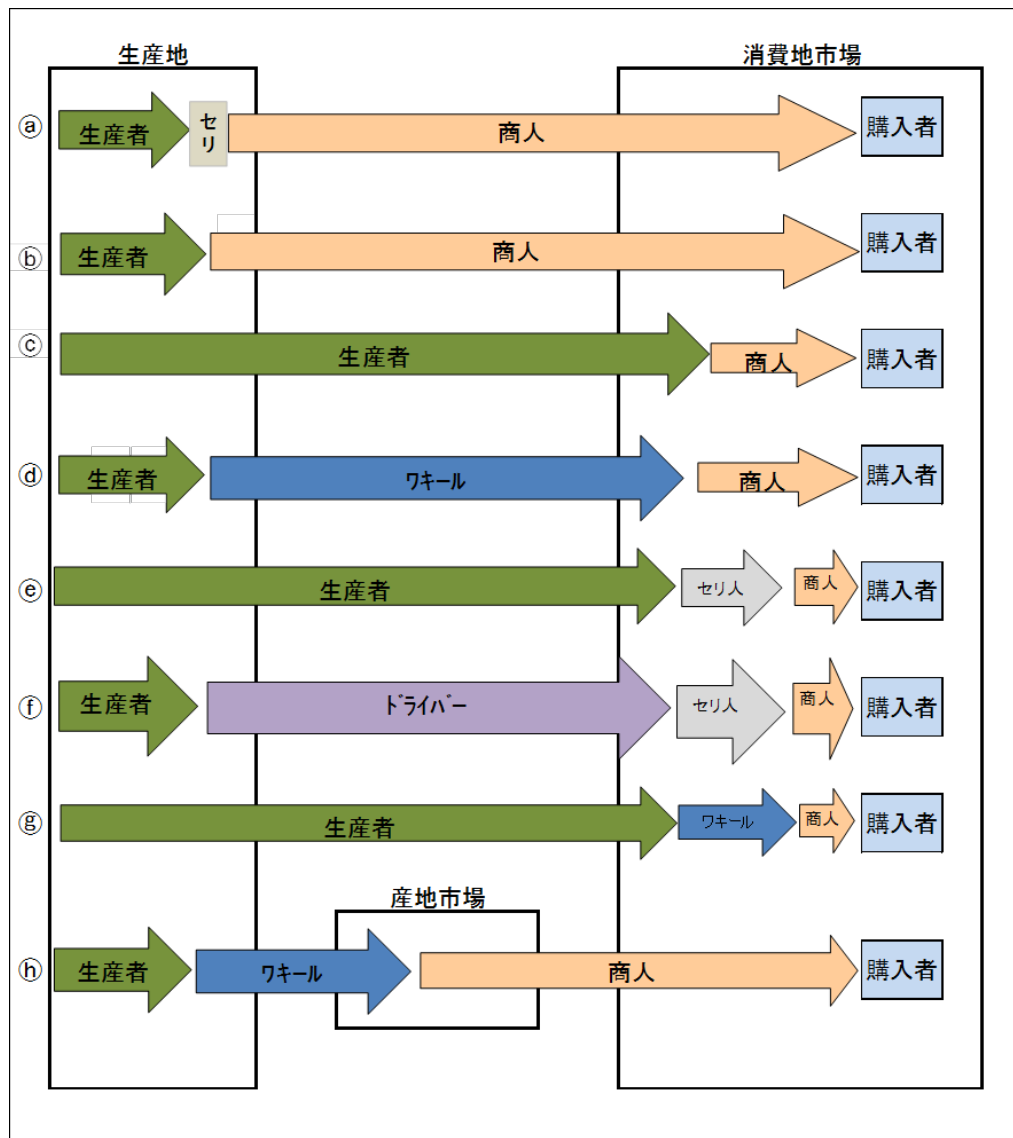
¹⁸ ドライバーは相当スピードを出している。例えばサアダーハラーホデイダは筆者のアシスタント（運転は下手ではない）なら 8 時間かかるところを、ドライバーは 5 時間しかかからない。もちろん危険な運転は事故にもつながる。ホデイダ⑦は調査の 2 か月前に父と兄弟 2 人合計 3 人を交通事故で失い（山道から転落し、インタビュー当時遺体も事故車も見つかっていなかった）、4 家族 25 人を養わなければならなくなった。

4-5-3. タイズの特徴

タイズもホデイダ同様に生産地と流通経路がかなり関係している。㉑はマーウィヤを仕入れる方法である。生産地で生産者がセリ人となり、商人はセリに参加してカートを仕入れる。㉒はサブリーを仕入れる方法である。㉓㉔はムレイシーを仕入れる方法である。㉕㉖はアウニーなどを仕入れる方法で、ウセイフィラ市場でセリ人がセリをする。ドライバーはセリ人が雇っている。㉗㉘はザグルーリー市場でアウニーやシャルabeeを仕入れる方法である。商人はワキールや生産者と相対取引をする。㉙はワカシー（イップ州）を仕入れる方法である。

タイズ市は生産地から近いが、商人が畑を見て数日分を契約することはない。生産地で仕入れるにしても、マーウィヤでは毎朝セリが行われ、サブリーも数日分のカートを確保することはない。

【タイズの流通経路】



4-6. 信頼関係の諸相

4-6-1. 顧客との関係

サナアのカート商人は顧客を抱えていることが多い。顧客を抱えることは収入の安定にもつながる。将来の需要を確保するために、顧客にはつけ払いも認める。

顧客を抱えているカート商人はホデイダで 10 人（①②④⑤⑥⑧⑨⑪⑬⑭）、タイズで 10 人（③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫）である。抱えている顧客の人数は 5-6 人から 20 人である。中には顧客からの売り上げの方が、一見客からの売り上げよりも多いというカート商人（タイズ④）や、顧客にしか売らない商人（タイズ⑩）もいる¹⁹が、このようなカート商人は少数派であり、顧客を抱えていても、一見客からの売り上げに頼る商人が多い。

顧客といえはつけ払いであるが、カート商人はどのくらいつけを待つのかというと、多くは 1 週間程度である。最短で翌日、長くても 1 ヶ月程度である。100 リヤルのカートをつけで渡し、翌日 110 リヤル支払ってもらうという方法もある。つけを払わずに逃げる客も少なくなく、その経験から、つけを認めないと断言するカート商人もいる（ホデイダ③⑧、タイズ③）。カート商人にとって、毎日買いに来てくれてなおかつ支払いが滞らない上得意客を確保することは難しい。

4-6-2. 仕入れ先との関係

サナアでは仕入れ先を固定しているカート商人はほとんどいないが、ホデイダ、タイズでも少数である（ホデイダ④⑤⑧⑨⑫、タイズ⑫⑬）²⁰。しかしホデイダ、タイズでは頼りになる地縁血縁関係があると、カート商人は非常に有利になる。ホデイダ②は父親と出稼ぎ先のサウディアラビアから故郷に戻り、出稼ぎで貯めた資金をもとに故郷のラダーアでカート栽培を始め、その後ホデイダに出てきて、故郷のカートを扱うワキールとなった²¹。タイズのサブリーの生産者は、同郷の（つまりタイズ市の南に聳えるサブル山出身者）商人（⑦⑧⑨⑩）にしかカートを売らない。サブリーはこれまでの調査で最も地縁血縁関係に依存したカートである。

ホデイダではアンシーやラダーイーに地縁血縁関係のある人がワキールになり、大量に仕入れる²²。タイズではサブリーは出身者しか仕入れることができない。特定の生産地と地縁血縁関係があると有利になる。

¹⁹ ④は若年ながらも今回の調査で一番利益を上げている。⑩は生産者でもあり、自分のカートや知り合いのカートを少量売っている。

²⁰ ホデイダ④⑤はワキールに雇われてカートを売り、固定給を毎日もらっているウンマールである（昼食、自分のカート、場所代などもワキールが支給）。彼らは特定のワキールに雇われているので、当然仕入れ先も固定されることになる。

²¹ アンシーやラダーイーは 1990 年代以降出稼ぎ資金をもとに生産が拡大したといわれる。

²² アンシーやラダーイーはサナア、タイズにも流通しているが、ホデイダほど地縁血縁関係の有利さが目立たない。他のカートの割合が多く、あまり人気がないからだと考えられる。

4-6-3. 家族との関係

家族の中に複数カート販売に関わる人がいるのはホデイダで5人(①②⑦⑧⑩)、タイズで9人(③④⑤⑥⑦⑪⑫⑬⑭) : ④と⑥は兄弟)である。その中で年少の親族に手伝いをさせているのは4人(ホデイダ⑧⑩、タイズ⑦の手伝いは息子、タイズ③の手伝いは姉妹の息子)である。

ホデイダから説明を補足すると、①は冬季だけおじ、兄弟とサアダに移動し、共同でカートを買入れている。②は現在ワキールを兄弟と息子に任せ、多くのウンマールを抱えている(②本人も市場にすることが多いので、引退したというわけではない)。⑦は以前は父、兄弟2人の合計4人で商売していた。父が仕入れたカートを息子たちが販売したり、地方に運搬したりしていた。

タイズでは、息子が父の仕事の見習い中なのは⑮で、高校生の息子たちは、学校が休みの時は父の仕事を手伝っている。兄弟みながカート商人になっているのは④⑥(兄弟6人)と⑤(兄弟6人)である。④⑥は父とおじがライマ州からタイズに出てきてカート販売を始め、上の兄弟は父から商売を習い、下の兄弟は兄たちから商売を習った(父、おじは現在引退)。

このように地縁血縁関係を利用してカート販売に従事している者は多い。ただし注意が必要である。

まず家族で分業することは少ないということである。ホデイダ⑦は上に述べたように父と息子たちで分業していたが、この事例だけである。息子が年少のうちは年長者の手伝いをし、息子が成長すれば、家族で分業するよりもそれぞれが独立してカート販売を行う傾向が強い。分業しなくても1人で仕入れから販売までできるという点で、カート販売は簡単なものかもしれない。しかしその分商人個々人の局所的知識[塩沢1990]は必要とされ、はっきりと結果となって表れる。

次に、家族でカートを買っているのは自分だけという商人も多いことである。ホデイダでは4人(⑤⑥⑫⑬)、タイズでは7人(⑧⑨⑩⑫⑬⑭⑯)は、家族で本人だけがカート商人である。タイズ⑧は父は農民、兄は教師で、「カートに未来はない」と反対されたが、小学6年生の時に学校をやめてカートを買売始めた。身内にカート商人がいたり、また故郷がカート生産地だったりするわけではなく、子供の頃からカート市場で手伝いとして働いていた(ホデイダ②⑬⑭、タイズ⑦⑧⑯⑰)、あるいはまったくカートと接したことなく商売を始める(ホデイダ⑤⑥、タイズ②③⑬⑭)というカート商人もいる。

最後に、息子をカート商人にさせたくないという者、身内を雇っていない者もいるということである。息子にはカート商人になってほしくないと言ったタイズ⑧⑨が断言した。⑧の息子は現在無職だが、⑧はカート商人になるなどいっている。⑨は息子3人を大学に通わせ、毎月送金している。タイズ⑯⑰は女性で、ともに年長の息子がいるにも

かかわらず、手伝いさえさせていない。

手伝いに身内を雇っていないのはホデイダで3人(④⑪⑫)、タイズで2人(⑤⑥)いる。ホデイダは市場に少年がうろついているので、身内以外の人を雇いやすく、また⑥はまだ本人が若いので年少の親族が少ないということもあるが、必ずしも身内だけを信頼するというわけではない。

頼りになる地縁血縁関係があれば確かに有利である²³。しかし家族で自分だけカートを買っていたり、息子にはカートを買らせなかったりする商人もいる。

4-7. カート販売に対する価値観

上イエメンでは売買行為だけでなく、売買行為をする人、売買行為が行われる場所も蔑視される傾向にあった。この中にカート商人も含まれていた[Dresch 1989]。現在では蔑視は軽減されているが、尊敬される職業というわけではない。この背景には上イエメンでは自給自足できる程度の農業が可能だったことが関係すると思われる。一方タイズを含む下イエメンは降水量が多いことから余剰作物を生み出し、それが歴代王朝やザイド派イマームの進出の理由でもあった。ホデイダ州では農業が盛んであるが、ホデイダ市内の発達はや遅かった。このためタイズやホデイダではカート販売に対し、サナアほどカート販売に対する蔑視はないのではないかと予想していた。しかし予想された差は確認できなかった。

小学校を中退してカート商人になった人もいれば、大学を卒業してからカート商人になった人もいるので、カート商人の学歴がみな低いわけではない。共通している理由は「カート以外に仕事がなかった」というものである。カート販売は非常に簡単に始められる。日本円で数千円あれば翌日からでもカートを買入れて売ることができる。取得すべきライセンスも、所属すべき団体もない。乗合でカートを買入れに行き、市場で適当な場所を探して売り始めればよい。あるカート商人は「カートを買えば2年で自分の家が持てる(ほど儲かる)」といった(ホデイダ②)。しかし調査したカート商人の利益は1日数千リヤルから数万リヤルまで幅があり、ほとんどの人が利益のない日もあるといった。ホデイダ②自身は賃貸住宅に住んでいた。カート販売を始めるのは簡単であるが、毎日十分な利益を上げることは簡単ではない。

4-8. おわりに

サナア、ホデイダ、タイズに共通しているのは、新鮮さが求められ、なおかつ多種多様なカートを提供するために、効率的な流通経路が形成されていることである。地

²³ 父と息子、兄弟というように、父系親族が利用されることが多いが、兄は頼れずに姉妹の夫に故郷の畑を任せている(タイズ⑫)、姉妹の弟を手伝いに行っている(タイズ②)という事例もあり、アラブ人＝父系社会＝父系親族というわけではない。

域別の特徴としては、サナアでは商人は生産地にアクセスしやすく、産地市場が機能し、生産地で数日分の契約を結ぶことも可能である。しかしホデイダ、タイズでは消費地市場でカートを購入することができ、生産地で長期契約を結ぶことはない。ホデイダでは遠距離からカートを購入するために、運搬を専門にする人が多く、タイズでは生産地や市場でセリが行われている²⁴。

サナアは部族的な紐帯が強い地域からカートが供給されているが、商人は部族的な紐帯に縛られずに、むしろカート販売はそのような紐帯がない人に開かれた商売となっている。ホデイダとタイズでは部族的な紐帯は崩壊しているが、しかしサナアよりも地縁血縁関係が有利に働く。この理由は、ホデイダではカートの種類がサナアに比べて少なく、夏季と冬季でカートの種類、流通量、価格が大きく変化し、生産地から遠いため、生産地と地縁血縁関係があると有利に働くことが考えられる。タイズの場合はホデイダ同様にカートの種類が少なく、ホデイダとは反対に生産地に近く、同郷の商人にしかカートを買わない生産者がいるため、生産地との地縁血縁関係があれば有利に働く。もちろん、有利な地縁血縁関係のないカート商人にも仕入れやすいカートは存在していて、それはホデイダではシャーミーやサアディー、タイズではマーウィヤ、ムレイシー、シャルアビーなどである。ワキールに雇われて、安定した仕入れ先と固定給²⁵を確保する方法もある。

しかし販売する上で、地縁血縁関係は有効ではない。商売を年長の親族から習える、年長者のコネを多少は利用できるが、それ以外はそれぞれの商人の局所的知識に基づく。この理由はカートが大規模化に不向きな商品であるからという、商品の性質も関係しているだろう。

サナアのカート商人は“浮気性”であると最初に述べたが、ホデイダ、タイズのカート商人も“浮気性”でなければ商売を続けることはできない。頼りになる地縁血縁関係も、父の代からの顧客も、一瞬で失いうるからである。仕入れ先のカートが早魃で壊滅状態に陥ることもある。特定の取引先だけを一途に信頼してはあつという間に商売は行き詰ってしまう。しかし3都市を比べると、サナアのカート商人が最も“浮気性”であるように思われる。ホデイダ、タイズはサナアほど“浮気性”ではない理由を考える上で注目すべき特徴を付け加えておく。

ホデイダではワキールの存在が大きい。ワキールに雇われていなくても、特定のワキールから常にカートを購入する商人や、売れ残った分の支払いを分割してワキールに支払う商人がいる。タイズでは地縁血縁関係者の結束が強いように思える。サブリー

²⁴ サナア近郊の産地市場でもセリが行われるとの情報を得たが、未確認。

²⁵ ウンマールの固定給は2000-1万リヤルなので、特にホデイダの夏季に、商売のうまくない者がウンマールとしてワキールに雇われるのは安定した収入の確保につながる。ウンマールはサナア、タイズにもいるが、ホデイダが一番多いと思われる。

は同郷者しか仕入れることができないだけでなく、仕入れる時に生産者と値段交渉せずにカートを手を託され、販売し、売り上げから一定の割合か一定額を商人が取り、後は生産者に渡すという方法が見られた。兄弟がみなカート商人になりなおかつほとんど同じ生産地のカートを手に入れているというのはタイズだけである²⁶。ホデイダ、タイズの家族と信頼のあり方に関しては今後も考えていきたい。

今回わずかながら行った生産地の調査で、“有機”農法で栽培するために品質は高いが大量生産ができない地域（シャーマー、サブリー）と、化学肥料や灌漑設備の導入でカートを大量に生産している地域（アンシー、ラダーイー、ハムダーニー）があり、冒頭の研究目的でカートは「生産者にとって貴重な現金収入源である」と書いたが、前者の地域ではカートは「貴重な現金収入源」であるものの、それほど経済的に豊かになっているわけではなく、生産地にも格差があることがわかった。またシャーマーやサァディー出身のカート商人はいないとの情報も得た。カート生産だけで十分な経済力を得られるからなのか、それとも商売に対する蔑視が強いのか。以上のことも考えていきたい。

5. 引用文献

- Dresch, Paul *Tribes, Government and History in Yemen*. Oxford: Clarendon Press. 1989.
- 片倉もところ、『アラビア・ノート：アラブの原像を求めて』、ちくま学芸文庫、2002。
- Lackner, Helen *P. D. R. Yemen: Outpost of Socialist Development in Arabia*. London: Ithaca Press. 1985.
- Al-Mugahed, Leen “Khat Chewing in Yemen: Turning over a New Leaf.” *Bulletin of the World Health Organization*. pp. 741-742. 2008.
- Niebuhr, Carsten (translated into English by Robert Heron) *Travels through Arabia and Other Countries in the East(1)*. Reading: Garnet Publishing Ltd. 1994(1792).
- 大坪玲子、「イエメン・サナアにおけるカート消費の変化」、『日本中東学会年報』、2005、20巻2号、171-196頁。
- 「イエメンにおけるカートの流通とその特徴」、『社会人類学年報』、2010、36巻、123-136頁。
- 「嗜好品カートと現代イエメンの経済・社会」、東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文、2012。
- 「誠実な浮気者：イエメンにおけるカート市場の事例から」、『文化人類学』、2013-a、78巻2号、157-176頁。

²⁶ 今回サナアの調査でサナア州マナーハ郡出身で父と4人兄弟みなカートを販売している一家に会ったが、兄弟で仕入れるカートは異なっていた。

————「嗜好品か薬物か：イエメンが抱えるカート問題」、『地域政策研究』、2013-b、
16 卷 1 号、1-19 頁。

————「コーヒーとカート：イエメンにおける商品作物の現状」、『地域政策研究』、
2014、16 卷 4 号、115-133 頁。

Peterson, John *Yemen: The Search for Modern State*. Baltimore: The Johns
Hopkins University Press. 1982.

Serjeant, R. B. “South Arabia.” Van Nieuwenhuijze (ed.) *Commoners, Climbers
and Notables*. Leiden: E. J. Brill. pp. 226-247. 1977.

Stookey, Robert W. *Yemen: The Politics of the Yemen Arab Republic*. Boulder:
Westview Press. 1978.

Swagman, Charles F. *Development and Change in Highland Yemen*. Salt Lake
City: University of Utah Press. 1988.

塩沢由典、『市場の秩序学』、筑摩書房、1990。

Wenner, Manfred W. *Modern Yemen 1918-1966*. Baltimore: The Johns Hopkins
University Press. 1967.

World Bank *Yemen: Towards Qat Demand Reduction*. Report No. 39738-YE. 2007.

ウェブサイト

المركز الوطني للمعلومات (National Information Center – Yemen)

<http://www.yemen-nic.net/index.php> (最終アクセス 2014 年 4 月 15 日)

国連薬物犯罪事務所

http://www.unodc.org/documents/wdr/WDR_2009/WDR2009_eng_web.pdf (最終
アクセス 2014 年 4 月 15 日)

6. 英文アブストラクト

Distribution Channels of Qat in Yemen: Sana'a, al-Hudayda and Taizz

Reiko OTSUBO ²⁷

Qat, the leaves of which produce a stimulant effect, is cultivated and consumed in Yemen. The purpose of the research is to clarify the distribution channels of qat in al-Hudayda and Taizz, and to compare them with those of Sana'a.

The distribution channels of qat in the cities are very effective. It is harvested in the early morning, sold in the markets around noon, and consumed in the afternoon: all the stages of the process are done within a single day. The government and private companies intervene little in the process, and only one or two merchants are involved. In the case of Sana'a, merchants go to the producing areas to get qat directly from producers, often making a contract which covers several days. Merchants in al-Hudayda and Taizz, however, can get qat in the markets inside the cities without going to the producing areas. There are many drivers specializing in the transportation of qat in al-Hudayda, which is far away from the producing areas. Auctions are held in a producing area and in a market in Taizz.

Merchants in Sana'a, where tribal ties are still strong, do not use the tribal ties to buy and sell qat. In al-Hudayda and Taizz, where it is said that the tribal structures were destroyed, blood relationships are more advantageous for getting qat. In al-Hudayda, where there are fewer kinds of qat and there is a big seasonal difference in the distribution amounts, a merchant is at a great advantage if he has a blood relationship with someone in the producing area. In Taizz, which is close to the producing areas but also has fewer kinds, there is a producing area whose producers sell their qat only to their relatives. But blood relationships are not so useful when merchants sell qat.

²⁷ University of Tokyo